

## ～ 巻頭言 ～



### 希望のミャンマー

法務総合研究所長  
酒井 邦彦

なぜ「希望のミャンマー」なのかは、後ほどお話しすることとして、とにかく今、

ミャンマーが熱い！

んです。なんでも、ミャンマーは、「今世紀、最後で最大のビジネスチャンス」らしく、すごいことになっています。アジアはもちろん欧米諸国のミャンマー詣でが過熱していて、ヤンゴンの主要ホテルは予約が取れない状態です。わが国も、経団連、経済同友会、日本商工会議所などのミッションが相次いでミャンマーを訪問しています。

なぜなら、ミャンマーが大きな可能性を秘めているからです。一つは、豊富な労働力です。約6000万人の人口があり、識字率は90%を超えるなど人材も優秀な上、人件費は中国の5分の1、ベトナムの3分の1ともいわれています。2番目にマーケットとしても魅力的です。高齢化の日本と異なり、生産年齢人口が9割を超え、すでに国民の消費スタイルが変わってきていますが、今後外資が増えれば、消費市場が飛躍的に拡大する可能性があります。第3に、天然ガス、錫、タングステンなどの資源も豊富です。第4に、地政学的な位置です。ミャンマーは周辺を6カ国に囲まれ、インド洋に面し、世界最大の人口を擁する中国とインドの間にあり、経済活動を展開する上でのロケーションも抜群です。経済的にこんなに魅力的なミャンマーを貪欲な国際社会が

放っておくはずはありません。

しかし、1988年の民主化デモとそれを鎮圧した軍事政権の誕生と前後して、アメリカや欧州各国は、ミャンマーへの直接投資禁止、ミャンマー製品の輸入禁止などの経済制裁を課し、日本もそれに歩調を合わせ、ミャンマーへの援助を人道支援等に限定しました。その結果、経済的にこれほどポテンシャルのあるミャンマーが世界の経済成長から一人取り残されてしまったのです。ところが、2011年3月にテイン・セインが初代大統領に就任し、軍政から民政へ移管し、検閲の廃止、政治犯の釈放などの民主化政策に相次いで着手したのを見て、欧米も経済制裁を解除し始め、その結果、世界のミャンマー詣でが始まったのです。

この先ミャンマーの民主化がどのような展開をたどるのかは、予断を許しませんが、軍事政権が中国企業に認可を与え大河エイワディの起点ミッションに建設中のダムをテイン・セイン大統領が、「世論が反対している」という理由で中止すると発表したことは、今までの軍政とは違うぞという印象を与えました。なお、このダム中止のエピソードには、欧米の経済制裁中にしたたかにミャンマーを取り込んできた中国と一線を画すという意味も見て取れます。このほか、大統領とアウンサンスーチーとの直接対話の実現、アウンサンスーチーと彼女の率いる

NLDの補欠選挙を実現させた政党法の改正、労働組合の合法化、報道の自由の保障などの矢継ぎ早の改革を見ると、この政権の民主化に向けての思いは、相当真剣なんだなという気がします。

今後ミャンマーが、議席の25%の議員は国軍が指名できるなどとした現行憲法を改正するなど、更なる民主化に成功するには、この数年で健全な経済成長を遂げ、国民が日々の生活において、そのことを実感できるようになるかということが大きな鍵になると思います。また、大統領は、就任翌日の演説で、「新政府の最も重要な仕事は、良い統治と汚職のない政府を創ることだ」と明言しています。それに加え、演説では「法の支配」が大切なんだとも強調していますが、これらを確実にやり遂げることも不可欠だと思います。そして、これらに成功すれば、「春」といいながら大規模デモが起こり、多くの死傷者を出している「アラブの春」と違い、柔らかでいかにも東南アジアらしい、平和のうちの民主化への移行を実現できるかもしれません。ASEAN各国や日本は、心の底からそのことを祈っています。

もちろん、外国からの開発援助（ODA）と投資なくしては、経済の改善は望みません。そして、独立自尊の気風が高く、大国嫌いのミャンマーは、どの国よりも日本からの援助、投資を待ち望んでいます。同じ仏教国で、共同体意識を重んじる稲作農耕民族、平和志向で国民の風貌も似ている両国です。ミャンマーは、戦後補償問題では、真っ先に賠償交渉に応じてくれましたし、国連等の場では、いつも日本の主張を支持してくれました。他方、1988年までは、日本は、ミャンマーに対する2国間援助の80%を占めるなど、最大のミャンマー支援国家でした。ですから、民政への移行後に、日本政府が、ミャンマー官民タスクフォースを立ち上げ、大型インフラ整備を含む総合的な支援策を打ち出したのも、ちょっと出遅れた感はあるものの、全く正しい決断です。

ミャンマーに必要なODAはたくさんありますが、

中でも国を支えるインフラの中のインフラというべきは司法制度ですので、法整備支援が何よりも大切です。身体でいえば背骨のようなものなので、すべてに優先するといっても過言ではないでしょう。例えば外国投資を円滑に進めるためには、会社法、証券取引法、知的財産法、労働法などの経済関係法の整備が必要ですが、それらの法律は、「契約」などの基本的法律関係を定める民法等の基礎の上に成り立つものなので、それと同時に基本法の整備と理解も不可欠です。大学の法学部でもまず基本法を勉強してから特別法を学ぶように。そして、紛争解決のための民事訴訟法等の手続法がしっかりしていなければ、これら法律は「絵に描いた餅」になってしまいますので、手続法の整備も必要になります。また、例えば、証券取引でインサイダー取引、株価操作などの犯罪が行われ、市場の透明性が損なわれれば、投資が著しく妨げられてしまいます。したがって、それら犯罪に関する刑事実体法と刑事訴訟法等の手続法が整備されていなくては、健全なマーケットは成立しません。そして、そのような法制度の運用に関わる裁判官、検察官、弁護士等の法律家の人材育成は、鎖国的な体制を敷いてきたミャンマーにとって、最も必要な支援でしょう。次に、開発援助や投資が国民生活の向上、ひいては更なる民主化に確実につながるためには、汚職防止等国のガバナンスがしっかりしていなければなりません。テイン・セイン大統領は、そのことを良く分かっているので、先のような演説をしたのです。さらに、国際規約に則った犯罪者の処遇制度などの整備も必要でしょう。以上のような分野は、いずれも日本にとって、経験と実績のある分野ですし、ミャンマーの人たちと良く話し合っ、そのオーナーシップを最大限尊重して、テラーメイドの支援を行うことができると思います。もう一つ大切なことは、国際社会に「遅れて来て」、これから外国投資が押し寄せるミャンマーにとっては、これらの改革にスピード感を持って取り組まなければならないということです。したがって、

法整備支援も複数の支援対象分野をパッケージとして同時並行的に速やかに展開する必要があると思います。

さて、これからがいよいよ、「希望のミャンマー」です。

ミャンマーという国やそこに住む人々については、次のようなことが異口同音にいわれています。僕自身は、来日されたミャンマーの法曹界の重鎮の方とお話をしたことがあるくらいですが、そんなつかの間の経験でもなるほどそうだと思うところがあります。

ミャンマーは、11世紀のバガン王朝時代から自由、平等、人権尊重に厚い民族で、世襲の貴族階級もなかったといわれています。国民の大半は、敬虔な仏教徒で、現世で功德を積んで来世で良い人生を送ることが人生の最高の目的で、他人のために喜捨する精神に富み、手に入れた富には固執しません。絶対に敬うべき相手として、僧侶、先生、両親がいて、若者は3分の1は僧院に寄進し、3分の1は両親に仕送り、残りを自分のために使うそうです。当然、ミャンマーの人々は礼儀正しく、親切で恥ずかしがりやで我慢強く、穏やかな人たちです。そんな国だから、治安はめちゃくちゃ良くて、世界で女性が一人で真夜中を歩ける国は、日本とミャンマーだけといわれています。いやそれどころか、強盗の発生率は日本の8分の1です。と、ここまで書いてだけで、なんだか日本と、特に昔の日本と良く似ているなあとと思いますが、それだけではありません。阿吽（あうん）の呼吸で理解し合えることは、あえて口に出さないとか、相手の面子をつぶさないという配慮から「ノー」といえないなんてところは、まるで日本人そのものではないですか。ミャンマー語は、語順まで日本語と同じらしいです。そんな国なので、ひとたびミャンマーと関わった日本人の多くが、「ビルメロ」（ビルマにメロメロ）になってしまうとか。逆にミャンマーの人たちも良く似たところの多い日本人が好きで、一時日本がミャンマーを占領したこ

とがあるのに大きな反日感情は生まれず、かえってインパール作戦などでは、多くの日本人がミャンマーの人に助けられています。

と、このようなことを書いたのは、これから来るであろう目覚ましい経済発展の中にあっても、ミャンマーには、いつまでもこの国の誇るべき美德を保ち続けていただきたいからです。ヤンゴンの佇まいは美しく、国民は伸びやかに生活して表情も明るいといわれています。人々は温厚、親切で、富には固執せず、人に何かしてあげることが何よりも好きだそうです。その一方で、誇り高く、独立自尊の気風で、大国の風下に立たないという気概があるということです。振り返って、わが国も江戸から明治にかけての時代には、「この国土の豊かさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見出すことができなかつた・・・」（ハリスの通訳ヒュースケン）、「貧乏人は存在するが貧困は存在しない。」（大森貝塚の発見者モース）、「この国のあらゆる社会階級は社会的には比較的平等である。金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。・・・本物の平等精神、われわれはみな同じ人間だと心底から信じる心が、社会の隅々まで浸透しているのである。」（イギリスの日本研究者チェンバレン）だったそうです（『逝きし世の面影』（渡辺京二著））。

グローバリゼーションの時代といわれています。そこでの行動基準は、それぞれの国特有の地理、歴史、文明、文化や国民性から、遊離した無機的な「グローバルスタンダード」で、それに基づく市場経済は「弱肉強食」の世界です。また、物差しで計ることができない心の豊かさより、経済的成功を何よりも優先する物質主義が社会に蔓延しがちです。このグローバリゼーションが怪物のごとく跳梁し、世界中の人の心をむさぼっているのが現代だと思いません。新興国で、新しいテレビ欲しさに娘を売るなどの冗談じゃない悲劇も起きています。我が国でも、訪れた外国人を魅了しつくした時代は「逝きし世」

になってしまいました。

でも、ミャンマーは、きっと経済発展の中にあっても、豊かな心を失うことのない平等な社会を実現できる国だと思います。アウンサンスーチーがある僧正を訪ねたとき、僧正から、豊かになりたくて自分を訪ねてきたのか問われたのに対し、豊かさを金持ちになることと誤解した彼女が金持ちに興味がないと答えたところ、手に入れることとのできる一番高価な宝は涅槃（筆者注：さとりと同義）のそれなのだといわれ恥じ入ったことがありました（「ビルマからの手紙 1995~1996」毎日新聞社）。そもそもアジアというのは、昔から和を以って尊しとする平和で優しい人々の住むところ。欧米のそれに勝るとも劣らない、それぞれの歴史や文化に根ざした深みのある人権の思想や平等の考えをしっかりと持っている国々です。2014年にミャンマーはASEANの議長国を務めるなど国際社会に対する存在感を強めていくでしょう。僕たちは、新生ミャンマーの登場を歓迎するとともに、親しい友人として、お互いの経験を共有していきます。そして、ミャンマーには、グローバリゼーションの時代にあって、経済的な発展を遂げながらも、豊かな心という最も大切なものを失わないでいられるんだというお手本になってもらいたいのです。

だから、僕たちの「希望のミャンマー」なんです。